

令和5年4月1日 改訂

いじめは、いじめを受けた生徒の教育を受ける権利を著しく侵害し、その心身の健全な成長および人格の形成に重大な影響を与えるだけでなく、その生命または身体に重大な危険を生じさせるおそれがあります。いじめをなくすには、「いじめは絶対に許されない」「いじめは卑怯な行為である」ことを生徒が十分に理解することが大切です。この基本方針は、本校におけるいじめ防止に係る基本的理念および責務を明らかにするとともに、いじめ防止および解決を図るための基本となる事項を定めることにより、生徒が安心して生活し、学ぶことができる環境をつくるためのものです。

1 いじめの防止等の対策に関する基本理念

- (1) 本校は、一人ひとりが互いの人格の尊厳を大切にし、相互に尊重し合う社会を実現するため、生徒が自分自身を大切にし、他者を思いやり、互いに助け合う「心の教育」と、そうした心に従い、勇気をもって行動できる人として育てることを重視します。
- (2) 本校は、すべての生徒が、まず、どんなことがあってもいじめを行わないこと、いじめを認識しながらこれを放置しないこと、いじめが、いじめられた生徒の心身に深刻な影響を及ぼす許されない行為であることについて、十分に理解できるように努めます。
- (3) 本校は、生徒が安心して生活し、学習その他の活動に心豊かに取り組むことができるよう、いじめをなくすことを目的に、市、市教育委員会、家庭、地域の関係者と連携して、いじめの防止等の対策に全力で取り組みます。

2 いじめの定義と判断

「いじめ」とは当該生徒と一定の人間関係にある他の生徒が行う心理的または物理的な影響を与える行為（インターネットを通じて行われるものを含む。）により、当該行為の対象となった生徒が心身の苦痛を感じているものを指します。けんかやふざけ合いであっても、見えない所で被害が発生している場合もあるため、背景にある事情の調査を行い、生徒の感じる被害性に着目し、いじめに該当するか否かを判断します。

3 いじめの防止等のための具体的取組み

(1) 「思いやりや助け合いの心を持って行動できる」子どもを育てる教育

○ほめて伸ばす教育

生徒の多面的な能力を引き出し、ほめて伸ばす教育を進めることにより、自分を大切にし、生徒同士が互いのよいところを認め合う人間力を高めます。

○人権教育の推進

人権教育を計画的・系統的に進め、発達障害のある生徒への理解等、自分だけでなく、他の人の大切さも認めることができる態度を育てます。

○体験活動の推進

集団宿泊体験やボランティア体験等を通して生徒の絆を強め、お互いに認め合い助け合う心を育てます。

○道徳教育の推進

教科書だけでなく、適切な資料やゲストティーチャー等を活用し、発達段階に応じた指導を計画的・系統的に行うことにより、思いやりの心や認め合い学びあう心、感謝の心を育てます。

(2) 学校評価への位置づけ

○いじめの防止等のための取組み（環境づくり、マニュアルの実行、アンケート、個人面談・保護者面談の実施、校内研修の実施等）に係る項目を学校評価に位置づけ、学校におけるいじめの防止等のための取組の改善に努めます。

○評価項目

【教職員】

- ・生徒の人権意識が高まるように心がけている。
- ・生徒が自己肯定感を高め、自尊感情を育むように心がけている。

- ・学級通信等で、いじめ防止の取組みを生徒や保護者に伝えている。
- ・生徒や保護者が相談しやすい環境づくりに努めている。
- ・いじめを早期発見できるように、定期的にアンケートや面談を実施している。
- ・生徒に不適切な言動があった場合、その場で注意・指導している。
- ・いじめの行為が疑われる場合、一人で抱え込まずに、速やかに学校の「いじめ対策委員会」に報告している。
- ・いじめに係る情報が学校の中で共有され、解消に向けて組織的に対処している。
- ・マニュアルや年間行動計画にしたがって適切に対応している。
- ・いじめ防止等について、校内研修に取り組んでいる。

【生徒】

- ・いじめの行為を見聞きした場合、速やかに先生や保護者等に伝えることを心がけている。
- ・学校（先生）は、悩みや不安を相談しやすい。
- ・学校以外にも相談できるところがあることを知っている。
- ・アンケートや面談を通して、悩みや不安を先生に伝えている。

【保護者】

- ・学校は、子どもの気がかりなことを相談しやすい体制を整えている。
- ・学校は、自校の教育相談担当者を含め、複数の相談機関を紹介している。
- ・学校は、いじめ防止等のための取組みを、学校ホームページや学級通信等で、生徒や保護者に伝えている。
- ・学校は、アンケートや面談を定期的実施する等、子どもの不安等を把握する取組みを行っている。

(3) いじめの未然防止

- 「いじめ対策委員会」の設置
いじめ対策について、指導の方策を協議し、具体的な活動を計画、実践します。
- 授業改善
すべての生徒にとって、分かりやすい授業のあり方について、公開授業や授業研究を行い、生徒が楽しく学べる教育に努めます。
- いじめの起きない学校・学級づくり
異年齢交流活動を行い、生徒が安心して過ごせる「心の居場所づくり」や生徒が主体となって互いに認め合い励ましあう「絆づくり」を進めます。
- 生徒の主体的活動の充実
学級活動や生徒会活動等を活用して、生徒の主体的な活動によるいじめ防止等の取組みを推進します。また、生徒会を中心に作成した「美山しぐさ」を遂行していくことに努めます。
- 開かれた学校づくり
「開かれた学校」の観点に立ち、いじめへの対処方針や年間指導計画等、いじめ防止策に関する情報を積極的に公表し、保護者や地域住民等の理解や協力を求めます。
- インターネットや情報機器に関する指導
インターネットや情報機器（スマートフォン・携帯電話・タブレット・ゲーム機等）の利用について、学校独自のルールづくりを通して、生徒や保護者が危険性や注意点等を考える機会を設けます。また、国の「教育の情報化に関する手引き」等を活用し、情報モラル教育の充実に努めます。
- 特に配慮が必要な生徒への支援
以下の生徒を含め、特に配慮が必要な生徒について、日常的に、当該生徒の特性を踏まえた適切な支援を行うとともに、保護者との連携、周囲の生徒に対する必要な指導を組織的に行います。
 - ・発達障害を含む、障害のある生徒
 - ・海外から帰国した生徒、国際結婚の保護者を持つなどの外国につながる生徒

- ・性同一性障害や性的指向・性自認に係る生徒
- ・東日本大震災により被災した生徒又は原子力発電所事故により避難している生徒
- ・新型コロナウイルスに感染、もしくは家族が感染した(感染の疑いも含む)生徒
- SOSの出し方に関する教育
危機的状況に対応するため、援助希求行動(身近にいる信頼できる大人にSOSを出すこと等)ができるための教育を行います。

(4) いじめの早期発見

- 積極的ないじめの認知
生徒の表情やしぐさをきめ細かく観察するとともに、わずかな変化に対してもいじめの兆候ではないかとの疑いをもち、積極的にいじめを認知するよう努めます。
- 自己チェックの活用
生徒が日々の生活を振り返るための自己チェックを行い、それを学級担任が確認することにより、いじめ等の早期発見に努めます。
- アンケートの実施
定期的にいじめの実態調査を行い、いじめ等の問題の早期発見に努めます。
- 教育相談体制の充実
学級担任による定期的な個別面談を通して、学習や人間関係の悩み等を聞き取ると同時に、適切な助言と学級全体への働きかけにより好ましい人間関係の構築を図ります。
- いじめに係る情報の記録
いじめに係る情報を適切に記録します。
- 家庭や地域との連携
家庭訪問や電話連絡などを通して、日ごろから保護者との情報交換を密にするとともに地域の住民や関係団体との連携を進めることにより、家庭や地域における生徒の変化を見逃さず、いじめ等の早期発見に努めます。
- いじめ対策委員会への報告
いじめを発見し、または相談を受けた場合、速やかにいじめ対策委員会に報告し、情報を共有します。

(5) いじめの事案対処

- 「いじめ対応サポート班」による対応
特定の教職員で抱え込まず速やかに情報を共有するとともに、「いじめ対応サポート班」による立案、対応により被害生徒を守ります。
- 被害・加害生徒への対応
いじめを受けたあるいは報告した生徒の心のケアを行い、安全を確保するとともに、いじめたとされる生徒に対して事情を確認した上で、適切な指導を行います。
- 外部人材の活用と関係機関との連携
必要に応じて、スクールカウンセラーやスクールソーシャルワーカー、スクールサポーター等の外部専門家、警察や児童相談所、地方法務局、医療機関、民生児童委員等の関係機関と連携を取りながら、早期解決に向けた最善の方法を講じます。
- 警察との連携
いじめが犯罪行為として取り扱われるべき場合や重大な被害等が生じる恐れがある場合は、直ちに警察に連絡し連携して対応します。

(6) いじめの解消

- いじめの解消については、少なくとも次の二つの要件を満たしているか確認するとともに、必要に応じ、他の事情も勘案して判断します。
- ①いじめに係る行為が止んでいる状態が、相当の期間継続していること。この相当の期間とは、少なくとも3か月を目安とする。
- ②被害生徒が心身の苦痛を感じていないと認められること。被害生徒本人及びその保護者に対し、面談等により確認する。

(7) いじめによる重大事態への対処

- いじめにより、「生命、心身又は財産に重大な被害が生じた疑い」や、「相当の期間、学校を欠席すること(30日間を目安とする)を余儀なくされている疑い」があるときは、国のいじめ防止基本方針やガイドライン等にしたがって、次の対処を

行います。

- ・重大事態が発生した旨を、市教育委員会を通じて地方公共団体の長に速やかに報告します。
- ・学校が調査主体になる場合は、調査組織の設置、事実関係調査、関係保護者への情報提供、市教育委員会への調査結果の報告を速やかに行います。
- ・市が調査主体になる場合は、事実関係を明確にするための調査に協力します。

4 いじめの防止等のための組織

(1) いじめ対策委員会

いじめの防止等に関して指導の方策等を協議するため、次の機能を担う「いじめ対策委員会」を常設し、定期的（月1回以上）に開催します。

（構成員）校長、教頭、生徒指導主事、保健主事、学年主任、教務主任、養護教諭、教育相談担当、特別支援教育コーディネーター、スクールカウンセラー等

- （活動）
- ・未然防止を中心とした、いじめ問題対応の年間行動計画の作成
 - ・教職員、生徒、保護者等に対し、学校いじめ防止基本方針について周知
 - ・「思いやりや助け合いの心を持って行動できる」子どもを育てるための具体的な活動の計画、実践、振り返り
 - ・いじめが起きない学校・学級づくりのための「心の居場所づくり」についての協議
 - ・生徒間の「絆づくり」のための計画的な教育活動の実践
 - ・いじめ発見のためのチェックシステムの工夫と迅速な情報交換、連絡体制づくり
 - ・校内研修や学級活動のための資料収集や資料作成
 - ・計画的なアンケート調査や個人面談の計画
 - ・記録の保存（保存期間：5年）※保存期間は市の文書管理規則等に基づく
 - ・いじめの認知
 - ・「いじめ対応サポート班」の設置
 - ・教育委員会や関係機関等との連携
 - ・学校評価への位置づけ、および学校いじめ防止基本方針に基づく取組みの点検
 - ・学校いじめ防止基本方針の見直し

(2) いじめ対応サポート班

いじめが起きたとき、次の機能を担う「いじめ対応サポート班」を設置し、いじめの早期解決に向けた取組みを行います。

（構成員）生徒指導主事、学年主任、担任、教育相談担当、養護教諭
スクールカウンセラー等

- （活動）
- ・当該いじめ事案の対応方針の決定
 - ・関係者からの聴取等による情報収集
 - ・いじめ対策委員会への報告、連絡、相談
 - ・被害生徒やその保護者への継続的な支援
 - ・加害生徒への指導やその保護者への説明
 - ・スクールカウンセラー、スクールソーシャルワーカー等の専門家や警察、児童相談所等との連携

(3) 組織図 【様式2】 P7参照

A いじめ対策委員会（リーダー：校長）の機能

- ・いじめ問題の未然防止や対応の中核となる常設組織が「いじめ対策委員会」です。
- ・学校いじめ基本方針に基づいて、いじめの未然防止等について、日ごろから指導の方策を協議、具体的な年間活動計画を立てて、方針や対策を決定します。
- ・教職員、生徒、保護者等に対し、学校いじめ防止基本方針やいじめ対策委員会の役割について周知します。

- ・「思いやりや助け合いの心を持って行動できる子ども」を育てるための具体的な学校での活動を計画、実践します。
 - ・いじめが起きない学校・学級づくりのための「心の居場所づくり」について協議します。
 - ・生徒間の「絆づくり」のための計画的な教育活動を実施します。
 - ・いじめ発見のためのチェックシステムの工夫および情報交換、連絡体制づくりを行い、情報が速やかに管理職まで伝わるようにします。
 - ・教職員の計画的な校内研修のための資料収集と資料作成を行います。
 - ・定期的なアンケートや面談を実施します。
 - ・学級活動のための共通資料を作成します。
 - ・気がかりな子ども等に関する事例検討会を開催します。
 - ・いじめの疑いがある場合には、速やかに情報を共有し、事実を確認します。
 - ・いじめと認知するかどうか、判断します。
 - ・いじめを認知した時は、「いじめ対応サポート班」の立ち上げを指示し、教育委員会や関係機関等と連携して対応します。
 - ・いじめの防止等のための取組みに係る項目を学校評価へ位置づけるとともに、取組みを点検します。
 - ・学校の実情に応じて、学校いじめ防止基本方針を見直します。
- B いじめ対応サポート班（リーダー：生徒指導主事）の機能
- ・いじめ事案に対する対応策を立案し、実行します。
 - ・関係者への聴取等による情報収集を行い、記録します。
 - ・いじめ対策委員会へ報告、連絡、相談します。
 - ・被害生徒やその保護者への継続的な支援を行います。
 - ・加害生徒への指導やその保護者への説明を行います。
 - ・対応が困難な場合には、スクールカウンセラーやスクールソーシャルワーカー、スクールサポーター等の専門家や警察、児童相談所、地方法務局、医療機関、民生児童委員等の協力を得ます。
- C 教育委員会との連携（リーダー：校長）
- ・いじめが起きた場合には、状況に応じて、市教育委員会との早急な連携を図ります。
 - ・いじめの状況について速やかに報告します。
 - ・「いじめ対応サポート班」の設置を連絡します。
 - ・今後の対応についての相談をします。
 - ・状況に応じて、指導主事やスクールカウンセラー等の派遣を要請します。
 - ・他の関係機関との連携の必要性について相談します。
- D 関係機関との連携（リーダー：教頭）
- ・いじめが深刻になることが懸念され、対応が困難な場合は、速やかにPTAや警察、児童相談所、青少年育成団体等と連携します。
 - ・対象の生徒が精神的に極度に不安定な場合には、心療内科等の医療機関と連携します。
 - ・家庭において問題が見られ、生徒や保護者に支援が必要な場合には、児童相談所や愛護センター等と連携します。

5 いじめ対策の年間行動計画 【様式3】

A 事前準備

- ・計画の事前準備として学校の実態把握の資料収集を行い、いじめに対してどのような内容をどの程度行えばよいかを整理していきます。

B 年間計画作成

- ・年間計画の作成に当たっては、PDCAサイクルで取組みを行うために、振り返りや見直しを行う時期を決定します。また、各学期の終わり、前期と後期など、振り返る時期を設定し、それに合わせて「取組評価アンケート」の実施、見直しの会議の時期、校内研修の時期などを決定します。質問項目は、国立教育政策研究所の「魅力ある学校づくり調査研究推進事業」で用いられる質問紙調査を参考とします。「学校が楽しいですか。」「みんなで何かをするのは楽しいですか。」「授業に主体的に取り組んでいますか。」「授業がよくわかりますか。」

など

- ・学年や学校全体で行う絆づくりや居場所づくり等いじめの未然防止に関わる活動をPDCAサイクルの期間内に少なくとも1回は実施するように計画します。

C 作成上の留意点

- ・いじめの未然防止の大きな視点として、授業改善が挙げられます。授業を担当する教員は少なくとも年間1回は授業を公開して、「分かる・できる」授業づくりに努めます。年間計画に公開授業についての校内研修を位置付けます。
- ・「分かる・できる」授業、すべての生徒が参加できる授業、学校のルールが守られている授業となっているかをお互いに見合い、高めていくような授業改善のための公開授業、校内研究を進めていきます。
- ・各学年で、特別活動や学校行事の中で、未然防止を特に意識した活動等を必ず年間計画に入れます。
- ・福井型コミュニティスクールとして、小学校と中学校との交流、あるいは小中が連携して行う活動なども取り入れます。
- ・いじめが起きやすい時期（5～6月、9～10月）には、生徒が主体的に活動する生徒会主催の「いじめ防止推進月間」等を設定し、いじめ防止に向けた集会や委員会の活動などを計画的に位置付けます。また、教育相談週間なども組み合わせ効果的に行います。
- ・全員の生徒と学級担任等が話をする個別面談、教育相談の期間を設定します。
- ・年間計画に従って未然防止に係る活動を進めながら、定期的に教員の自己評価や学校評価を行い、取組の改善を図ります。
- ・作成した学校いじめ基本方針（組織図や年間計画を含む。）はPTA総会で説明したり、ホームページで公開したりするなど、保護者や地域に広く公開し、理解を得ながら、協力していじめ問題に取り組む体制を作ります。

